



トコトンの生きものバンザイ!

葛根湯～薬と植物のはなし～

「^{かつこんとう}葛根湯」は、よく知られた漢方薬のひとつです。読んで字の通り「^{くず}葛」の根に含まれる成分を活かした風邪薬です。

皆さんは「^{しょうやく}生薬」という言葉を聞いたことがありますか。生薬は長い年月をかけて薬の効果があると確認された動物や植物、鉱物を加工したもので、現在日本では約160種類が薬の基本台帳である「日本薬局方」に記載されています。このうち約9割が植物の葉や実、根です。

漢方薬は、生薬を一定の組み合わせにより調合したもので、その割合や用法は症状によって異なります。ちなみに、葛根湯は、発汗・解熱作用があるとされる葛の根をはじめ7種の生薬が配合されています。



生薬「葛根」



葛の花と葉

さて葛は、秋の七草のひとつで、日当たりのよい斜面等に自生するマメ科のつる植物です。市内でもいたる所に自生しているため、目にすることも多いでしょう。つるの長さは10mほどにもなり、夏の終わりから秋にかけて花が咲きます。根は直径10～20cmほどの太さになり、秋から冬にかけて掘り出して乾燥させたものが生薬となります。また、根から取ったデンプンは「くず粉」として、くず湯や和菓子の材料として用いられます。

現在用いられている薬の多くは工業的に合成されたものです。しかし、そのほとんどが昔から世界中で薬として用いられてきた植物に含まれる成分です。地球上には名前がついている植物だけでも30万種類はありと言われており、薬効が認められる植物の研究は現在も続けられています。多種多様な植物は無限の可能性を秘めていますね。

問い合わせ

環境局自然環境共生課 TEL 322-5316